

青年期のアイデンティティにまつわる問題の起点

小沢 一 仁*

はじめに

これまでの論考で、筆者はアイデンティティ研究の目的を自己理解(西平, 1970 など; 落合, 1993 など)として捉えてきた。その中で、自己理解とは、自分への問い (Spranger, 1927; 渡辺, 1995 など; 天谷, 1996 など)の発生を受けて、その問いに答える試みであったとした。さらに、アイデンティティ概念をこの自己理解の中に取り入れ、アイデンティティ危機によって生じた自分への問いに対して、アイデンティティの達成をめざすことが、この問いへの答えを模索することであると捉えた。そして、エリクソン (1959 など)によるアイデンティティ達成に関する三つの記述を抽出した。アイデンティティ達成とは、第一に、社会の中で自分の適所を得ることであり、第二に自分自身の過去の子どもの時代から現在の青年期に同一化群を統合することであり、それらによって第三に、自他承認の感覚であるアイデンティティの感覚を得ることであると捉えられた。この記述から、アイデンティティを居場所と物語として捉えたのである。以上の作業は、自己理解のための概念として、アイデンティティ概念を捉え直そうとするものである (小沢, 1996, 1997)。

さらに、筆者は、西平直 (1997) の「アイデンティティの出自」として、何かと何かのズレがアイデンティティについての問題を生むという指摘によって、アイデンティティ概念をもう一度その根本にさかのぼって問い直すことになった。この西平直の「ズレ」の指摘を、主観的な違和感として言い換え、この自分に対する主観的な違和感のもとを辿ってみた。そして、アイデンティティが

問題になるとときには、西平直の言うズレが生じており、この違和感を辿っていくと、「私が私であること」、「自分が自分であること」に行き着くと考えた。つまり、自分が感じる、このように生きている自分に対しての違和感が、その起点にあると考えた。これを、アイデンティティにまつわる問題の始まり、「アイデンティティの起点」と呼んだのである (小沢, 1997)。

本論では、まず、西平直のズレへの言及に再度触れながら、ズレからアイデンティティの起点に至るまでを、同一化及び自分への問い直しの説明によって、明らかにする。次いで、この起点からズレの修復を目指していく試みを、居場所を求めめる役割実験の説明によって明らかにする。以上の考察を通して、アイデンティティ概念が他の用語ではなくアイデンティティという用語を使わなければならない所以は何かという問題提起 (溝上, 1997) に対して答えていこうとすることができると考えられる。

1. 西平直のアイデンティティのズレの再考

(1) アイデンティティにおけるズレ

西平直 (1993) は、「アイデンティティという言葉が、常に<何か>と<何か>の二重構造」という「ズレ」を「表現」しているとしている。アイデンティティには、ズレがつきまとうのである。それでは、アイデンティティに関するそのズレは、どんなズレなのか、言い換えれば、何と何との間のズレなのか。西平直は、ズレの一つとして「主観的・個人的」と「客観的・社会的」の間のズレをあげている。これは言い換えれば、主観的に捉える自分と社会的に他者から捉えられる自分との間のズレである。

西平直 (1993) は、身分証明証 (アイデンティ

* 東京工芸大学工学部 基礎教養
1998年9月16日 受理

ティ・カード)を取り上げ、自分が自分であることを他者が承認することが必要な場合、例えば私が小沢一仁という人間であることを誰かに承認してもらうことが必要な場合、免許証等の身分証明証が必要となることをあげている。私が小沢一仁であることは、当たり前のことであるが、私と面識のない他者にとってみれば、私が小沢一仁であることは当たり前のことではない。そこで、私と小沢一仁という人間をつなげるもの、ここでは身分証明証が必要になるのである。この場合、私にとっての自分と、他者からみた私という人間には、身分証明書なくしては埋めることのできないズレが生じているといえる。このように、自分自身が二つに分割されることによって、ズレが生じる。このズレは、自分にとっての違和感、言い換えれば、主観的な違和感といえる。

(2) ズレの発生するところ

エリクソン(1959)は、自分自身の斉一性(sameness)と連続性(continuity)への確信が他者からも承認されることをアイデンティティの感覚と述べている。この斉一性(sameness)と連続性(continuity)について、鑪(1995)は以下のように言及している。まず、個人が様々な他者との関わる上で、私は様々な自分を表しているだろうが、それぞれの自分が、つながっており同じであることが、斉一性(sameness)であると指摘している。次に、個人の時間の流れの中での発達的变化について、過去や未来の自分と現在の自分がつながっており同じであることが、連続性(continuity)であると指摘している。この指摘からズレの発生を考えると、時間軸上でも、空間軸上でも、その可能性がある。

特に、時間軸上の変化においては、過去と現在のズレだけでなく、現在と将来の予想との間にもズレが生じる。つまり、発達的な変化によるズレだけでなく、回想し予想する中でもズレが生じるのである。これも時間軸上の変化に含まれると考えられる。

人は、生きていく中で、時間的な変化及び空間的な他者との関係及び社会的状況の変化など様々

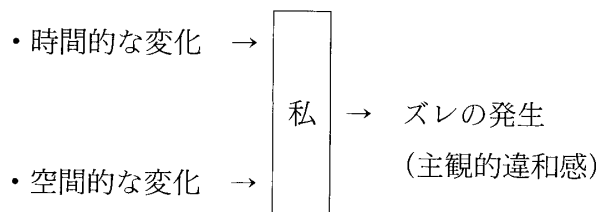


図1 ズレの発生

な変化に、さらされざるを得ない。そこから、様々な主観的な違和感であるズレが発生する可能性があるといえる(図1参照)。

2. 私が私であること

一 同一化とアイデンティティ(同一性)

(1) 変化の時期としての青年期

特に青年期は、アイデンティティ・クライシスの時期であり、変化の時期である(Erikson, 1963)。身体的、心理的、社会的にも変化にさらされ、青年は危機を迎える。言い換えると、身体も心も、対人関係も社会的状況も変わっていく。この変化によるズレについて、例をあげて見ると、身体的には、過去の子どもの時の自分の身体と、変化していく現在の自分の身体との間のズレがある。また、心理的には、他者の目または他者からの評価が気になるようになり、自分への問いが生じ、日常生活を生きている自分と、その自分を問う自分との間のズレが生じる。対人関係では、自分が規定する自分と他人が規定する自分との間のズレがあり、社会的状況では、小学校・中学校という義務教育後の進路の選択、学校から社会へと生きる状況の変化がありその中で、自分の希望と周囲の期待とのズレ、または、自分の希望と実現可能性との間のズレがあげられる。

このように、生涯発達の中での青年期は、子どもから大人への過渡期である。この時期には様々な変化が生じ、発達的にズレが生じやすい時期であるといえる。

(2) 同一化からアイデンティティへ

次に、主観的な違和感であるズレを、精神分析

における防衛機制の中の同一化とそれに続くアイデンティティへのプロセスから、辿ってみる。

エリクソン (1959) は、防衛機制の発達の概略を「とり入れ—投影, 同一化, アイデンティティ」として示し、「アイデンティティ形成は, 同一化の有効性が終わるところから始まる」と述べている。また, アイデンティティとは, 「同一化群を統合」したものであり, 「同一化群の総和以上のもの」であるとしている。つまり, 同一化の次の防衛機制として, アイデンティティがあげられているのである。

同一化とは, 幼児期におけるエディプスコンプレックスという, 父親と母親への愛情と憎しみのアンビバレントな葛藤を解消するための防衛機制であり, 同性の親である, 父親のようになろう, 母親のようになろうと思いつくことによって, 異性の親に対する愛情を得ようとするのである。

また, 大人であっても, 我々は日々の生活の中で, 同一化を行っており, 例えば, ひいきの野球チームやサッカーチームが勝つと自分が勝ったかのように喜び, 負けると悔しがめることはよくある。そして, お気に入りの選手が, 活躍すると自分が活躍したかのように喜び, 失敗すると自分が失敗したかのように悔しがめる。また, 映画を見たあとに, 映画の主人公の気分になることがあったり, テレビドラマを見て, 主人公の一挙手一投足に, 嬉しがったり悲しんだりする。さらには, 若者は, 俳優やタレントのファッションを真似, 自分も彼らのようになったかのように思う。このような同一化は, 味気ない日常生活にアクセントを与えてくれるものである。

このように同一化においては, 私はここにいる私ではなく, 別の人物である。しかしエリクソンは先に示したように, 「同一化の有効性が終わる」時が来ることを述べている。エリクソンは「アイデンティティ形成は, (児童期の)同一化の有効性が終わるところから始まる (Erikson, 1959)」と述べていた。このことは, 他者 (親, 何かの主人公, タレントなど) との同一化が, 自我の芽生え (Spranger, 1927; 渡辺, 1992; 天谷, 1997), 自己の個別性の自覚 (落合, 1983), 言い換えると,

自分自身への問い直しによって, 終焉することである。

同一化において自分が他者のようになったかのように思うことは, 日常生活の中で罪がないことであるが, 突き詰めて本当に自分は彼らのようになったのか, もしくは, 同一化の対象である彼らなのかと問いかけると, 残念ながら, 私は, 同一化の対象である憧れの人物ではなく, ここにいる私自身でしかない。

また, シュプラングァー (1927) によって, 青年期における「自我の芽生え」と呼ばれている現象は, 自分とはいったいどういう人間かを問うことである。天谷 (1996, 1997) はこれを自我体験と呼んでおり, 自分というものへの問いから自分というものの意識の確立へのプロセスを提示している。また, 落合 (1983) は, 孤独感の中の二つの次元の一つに「自己の個別性の自覚」をあげ, 自分自身を問いそして自分という人間がたったひとりしかいない独自の存在であることを意識することを示している。このような指摘は, たったひとりしかいない自分という人間の存在を再確認することである。

まとめると, 自分自身を問い自分自身の存在を突き詰めることは, 落合や天谷の指摘するように, 自分への問いを発して, 自分が独自で個別な存在であることを自覚することである。そこで, たったひとりしかいない人間であることを自覚する。つまり, 自分が自分であることに向き合うことである。ここにおいて, 同一化はその有効性である魔力を解かれ, 自分という人間を見つめていくことになる。そして, ここから自分が自分であることが問題になり, アイデンティティがテーマになっていくのである。同一化からアイデンティティへの転換について, 発達段階として青年期がその時期であることは, エリクソンによって示されているのであるが, その内実には, ここで検討したように, 自分への問いによる同一化の終焉があるといえる (図 2.3 参照)。

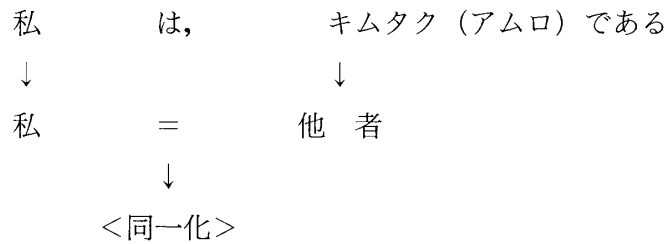


図2 同一化

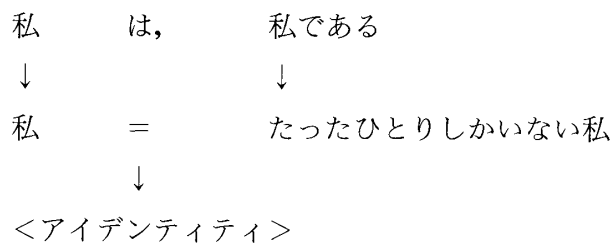
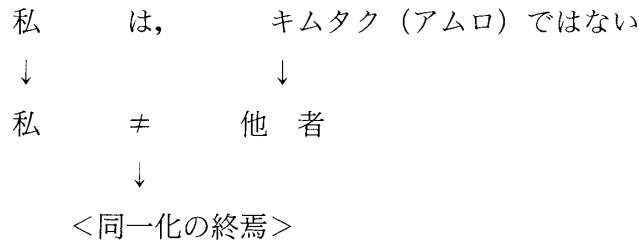


図3 同一化の終焉からアイデンティティ

3. ズレの根本を辿る

ーアイデンティティ問題の起点

(1) ズレの起点を辿っていくと

ーアイデンティティ問題の起点

再度、アイデンティティが問題になるその始まり、起点を問題にする。先に示したアイデンティティ自体がもつズレの問題とは何か。時間の流れにそのはじまりを求めることもできるだろうか。時間が止まっていれば、ズレは生じることはないだろう。また、空間を閉鎖して、他者や社会との交流を一切遮断すればズレは生じることもないだろう。このように、時間を止め空間を遮断すれば、ズレは生じないだろうが、それは不可能なことである。特に、空間的なズレに関しては、自分と他者との対立、文化における習慣の違い、などの結果、ズレという違和感をもつことが、そのきっか

けとしてあげられる。ただ、もっと時間や空間以前に、ズレが生じる問題はないだろうか？つまり、ズレの起点を、他者との関係や対立の奥にある自分自身に求める視点をもつことが、アイデンティティの根本を見つめることにつながると考えられる。

例えば、過去の自分と現在の自分とのズレ、現在の自分と未来において思い描く自分とのズレ、これらのズレは二つのものの間の違和感であるが、二つの自分とも、自分自身である。いつの時点での自分なのかには違いはあるが、ともに自分が問題になっている。また、例えば、自分で見た自分と他人から見える自分のズレにおいても、どこから見た自分かにおいては違いはあるが、ともに自分が問題になっている。時間及び空間に関するズレにおいても、自分という人間が問題になっている。

(2) 再び同一化から

先に示した、エリクソンの記述した「アイデンティティ形成は、(児童期の)同一化の有効性が終わるところから始まる (Erikson, 1959)」という引用によると、同一化からアイデンティティへの転換とは、自分がまさに他の誰でもない自分であることに直面することである。先に示したように、青年心理学の中で言われてきた自我の芽生え、自我体験、自分への問い、自己の個別性の自覚などの指摘は、同一化の終焉と関連するものである。ここで再びくりかえしてまとめると、<自分=他者>という同一化が、本当に自分は誰なのかという問いによって、成立しなくなり、<自分≠他者>であることに気づく。自分は自分でしかないこと、自分は他の誰でもないこと、他の誰にもなれないことを知る。つまり、<自分=自分>を自覚せざるを得なくなる。

しかし、問題は、自分が自分でしかないことに直面した際に、自分のことを否定したり、拒否したいという思いが生じてくることがある。それは、この自分を他者が受け入れてくれないことがきっかけになることもあるだろうし、他者との比較から、また、何かの基準に照らしてみても、この自分を自分で受け入れられないと感じることもあるだろう。この時は、<自分≠自分>と感じてしまう。つまり、アイデンティティが問題になるその始まり、起点、言い換えると、アイデンティティ概念自体がもつズレの問題は、どこから始まるのかと考えると、この<自分≠自分>と感じてしまうこと、言い換えると、自分が自分であることに、ズレをもつこと、違和感をもつことに辿り着く。

私が私という人間として生まれて生きていなければ、私のもつ様々なズレは私において生じていなかっただろう。もし、仮定として別の人間として生きていけば、別の人間としてのズレを体験していただろう。また、個人は、その人として生まれて生きているからこそ、その人におけるズレを体験しているといえる。このように、私が私であること、自分が自分であることに違和感をもつことが、アイデンティティにまつわるズレの問題の発生の起点といえることができる。

(3) 自分が自分である

—それぞれの自分とは何を指すのか

ここで、私という自分における、何と何の間に、ズレすなわち違和感をもっているのか？を問いかける。それは、私という心と、私という人間と言わざるを得ない。違和感という言い方をすれば、私という心が、私という人間に対して違和感をもっているのである。つまり、私という人間において、時間的変化や他者との交流において様々な変化を受け、私という人間と、私という心との間に、ズレが生じる。

このように、私という心をもった自分と、ある時代と社会の中で様々な制約や限定をもって生きている自分とのズレに行き着く。この前者の自分と後者の自分とのズレを「アイデンティティの起点」と呼んだのである (小沢, 1997)。

まず、前者の自分とは、Eriksonら(1986)の「私(I)」に相当するものと考えられる。Eriksonは、この私(I)を「フロイトのIchが英訳された自我(ego)ではなく・・・日常生活の意味での私」であり、「気づいていること(awareness)の中心である」としている。自分が自分であること、言い換えると、私が私であること(I am me.)は、問うている私と問われている私が分割されている。これは、私という人間がふたりになった訳ではなく、私というひとりの人間を問う視点である私が生じているといえることができる。この自分を問う視点である私こそ、意識の中心であり、私という心である。

次に、後者の自分を考える。前者の意識の中心である私から、私を見るとどう見えるのであろうか。そこには、まず、他者との比較対照が前提となっているとはいえ、自分と他者を比べた結果、見えてくるものは、たったひとりしかいない自分という人間である。さらに、先にあげたズレの問題において重要なものは、様々な制約をもった自分を自覚することがあげられる。生きている時代、生まれた国・文化・人種・民族・地域、親や親戚やきょうだい、身体・性別・容姿・身体的能力・才能・興味・関心など、これらは、自分にとって自らが選んだものとは思われないものもある。そ



図4 私が私であること

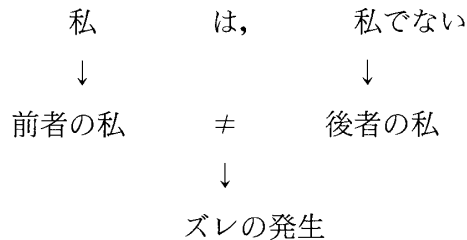


図5 私は私でないこと

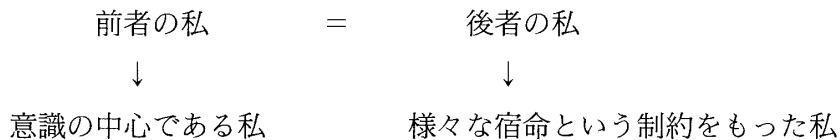


図6 前者の私と後者の私

れらは、宿命として自分に受け入れるしかないものである。このように、様々な宿命という制約をもった自分という人間がいることが、後者の自分である。

まとめると、この自分が自分であること、における前者の自分とは、ジェイムスのI、エリクソンのI (Eriksonら、1986)、つまり、私という心をもった自分と言える。これに対して、後者の自分とは、ジェイムスのMe、もっと言えば、この時代、国、文化、人種、民族、地域、性別、親、きょうだい、出会う他者、身体、容姿、能力、才能、外的な体験など、様々な制約や限定をもって生きている自分を指すと考えられる。

このように、私という心をもった自分が、私というこの時代に生き様々な制約をもって生まれ生きている自分であることを考えると、この二つの自分の結びつきを、宿命と言い、日本語の言葉にある「縁」と言うことができる。通常縁とは、親子の縁とか、人との出会いについて、適用される言葉であるが、自分が自分として生まれてきたことに対して、「縁」という言葉で示すことができ

ると考えられる。このように、自分が自分であることの「縁」を、アイデンティティにまつわる問題の起点として、考えることができる。

問題は、この宿命をもった自分自身に対して、受容して受け入れることが難しい場面があることである。つまり、私は私であることを、認めたくない状況が生じることがある。「私は、私ではない (I am not me.)」、「本当の私は、こんな私ではない」つまり、これが、西平直の言うズレの発生の源にあると考えられる。つまり、ズレの様々な内容の種類は、宿命の問題の現れる焦点の違いと言い換えることができる (図4~6、参照)。

4. ズレの修復の問題

(1) 適所の獲得としてのアイデンティティ達成

これまで見てきたようなズレを、人はどのように修復を目指して生きていくのであろうか。エリクソンは (1959)、小説家のバーナード・ショーの言葉を引用し、「確かなのはすべての人間は、自分の可能性を実現し、その影響を隣人に及ぼすまでは社会の中でかりそめの位置しかしめられな

い。・・・すべての人は自分の生まれより上であろうと下であろうと自分の自然な居場所 (find his natural place) を見つけるまでは、心穏やかでいられない。」としている。そして、「この時期は、心理社会的猶予期間としてみることができ、この間に青年は、自由な役割実験を通して、社会のある部分に適所 (niche) を発見する。・・・この適所を発見する中で、青年は内的な continuity と社会的な sameness の確かな感覚を得る。」と述べた。つまり、役割実験を通して、適所を得ることが、自分自身の斉一性 (sameness) と連続性 (continuity) における他者からの承認を得る感覚である、アイデンティティの感覚を得ることにつながると述べている。

このアイデンティティの感覚 (sense of identity), つまり、自分自身について自分自身も承認でき、また、他者からもそういう自分について承認される感覚は、まさに得がたいものであるが、この感覚はまさにズレという主観的な違和感が修復されたものであるといえる。ただ、この感覚は永続するものではなく、さらなる変化を受けて再度ズレが生じていき、それをまた修復していくことが生涯発達の中で繰り返されていくものである。エリクソンの「アイデンティティは生涯に渡って発達し続けるものである (Erikson, 1959)」という言葉は、このようにズレの発生及び修復と捉えることができる。

(2) 青年期における通過儀礼及び役割実験を通してのズレの修復

生涯発達の中で、子どもから大人への過渡期である青年期に焦点を当てると、その子どもと大人の境目に、通過儀礼が設定されている文化がある。この儀式は、子どもではなくなった自分と大人でもない自分の間のズレを、大人としての自分になることによって修復することを目的としているといえる。

これまで筆者は、エリクソンの役割実験を、形骸化した通過儀礼である成人式に替わるものとして捉えた (小沢, 1992)。そして、文化人類学の知見から通過儀礼に含まれる 3つのプロセスを取り

上げた。まず、第一の「分離」は子ども時代の自分から、そして親からの自立を意味し、第二の「試練」は大人になっていく自分の資格を試すものであり、自分自身の勇気が試される。第三の「統合」は、大人としての役割を身につけることである。この通過儀礼の 3つのプロセスは、そのまま役割実験にも当てはまるものと考えられた。

この役割実験には、失敗することもあるだろうし、一度ではすまないこともあるだろう (河合, 1980)。また現代では大人になりたくないのでもなくともいいという選択をすることも許されている。確かに、大人とは何かという基準もわかりにくい時代である。しかし、自らがこのような人間になろうと志し、試みる役割実験には、自分が自分であることのズレを修復する可能性がある。

(3) 役割実験—居場所を求め、ズレを修復しようとする試み

これまで、ズレという表現をきっかけに、アイデンティティにまつわる問題の起点にさかのぼろうとし、自分が自分であることに辿りついた。そして、もっとも根本的なズレは、自分が自分であることにあると考えたのである。そして、このズレを修復しようとする試みとして、エリクソン (1959) のあげた役割実験を捉えた。青年期におけるアイデンティティ達成を、社会の中の自分の居場所、しかも適所の獲得として捉えると、役割実験は居場所の獲得のために重要である。しかし、役割実験には、それ以上の意味があると考えられる。

それは、これまで考察したように、自分が自分であることのズレを修復する試みとしての意味があると言える。ここで付け加えた役割実験を通じた居場所の獲得は、社会の中での他者と共に生きていく上で必要であるという意味があるが、同時に、自分が自分であることのズレを修復する試みという意味もあることを示すことができる。

自分が自分であることの、後者の自分に含まれる宿命及び縁に関するズレは、本当に、役割実験を通じた居場所の獲得によって、修復できるのかという問いも投げ掛けられるであろう。非常に困

難な場合もあると考えられるが、現実の社会の中で生きていく上で、個人に何ができるかを問いかけた際に、居場所の獲得を重視したい。その試みである役割実験に、アイデンティティにまつわる問題の起点である、自分が自分であることのズレの修復の試みという意味を見い出していきたい。

また、アイデンティティにおける生涯発達は、居場所を探し失いまた獲得し続けることと捉えられるが、その過程での役割実験は、青年期だけに重要なものではなく、生涯に渡っての居場所の探索において重要なものと考えられることができる。

5. ズレの基準

—自分を問い直す上での判断の基準とは

(1) アイデンティティ危機における葛藤の焦点からズレの基準を考える

これまで見てきたような、ズレという違和感を我々がもつときに、その基準となっているものは何であろうか。厳密な意味で同じ体験を二人の人間がすることはないのであるが、ここでは仮定として同じ体験を二人の人間がしたことを考えると、一人はその体験に対してズレをもち、もう一人はズレをもたないことはありえる。この場合、何がこの二人がズレをもつかもたないかをわけるものになるのであろうか。それが、ズレの基準といえるものである。

筆者ら（小沢・高木，1986）は、学生から社会へという居場所の転換点において、アイデンティティ危機における葛藤の内容について、次の6つをあげた。

- ①本当に自分のやりたいものは何かという葛藤
- ②自分の希望と親の期待との対立という葛藤
- ③自分のやりたいものの実現可能性についての葛藤
- ④自分の性格についての葛藤
- ⑤恋愛についての葛藤
- ⑥自らの性として産まれてきたことへの葛藤

これらの葛藤の内容を、アイデンティティ危機における葛藤の焦点と呼んだ。この中の①から③は、主に社会の中で自分がどんな職業についていた方がいいのか、についての葛藤である。これらについ

て見てみると、まずは自分のもつ希望、思いが根本にある。その希望をめぐる、親と対立したり、現実の壁にぶつかったりするわけである。自分が本当にやりたいものは何かということが明確にならないと、親の期待との対立や、現実の中での実現可能性について悩むことはない。ズレという表現を使えば、親の自分への期待とのズレ、そして、現実の壁とのズレは、本人の心の中で明確なものとしてつかめていない場合でも、暗黙の内にとしてでも、自分のこうしたいという希望、思いがなければ、成立し得ない。この点で、社会に出て何になつたらいいのかという、社会の中の居場所についての葛藤の基準には、社会の中での自分の居場所についての希望があるといえる。さらに、その希望がわからない葛藤についていえば、その居場所についての希望をもちたい自分と、その希望をもつことができない自分との間のズレであるといえることができる。

次に、④の性格についての葛藤は、具体的には今の自分の性格が嫌だとか、嫌いであるというものであるが、この葛藤についても、自分がどういう人間でありたいかという思いと比較して現実の自分との間にズレを感じているからこそ、自分の性格について悩みをもつといえる。⑤の恋愛についての葛藤も、自分はこの人のことが好きであるという思いがその中心にある。それが果たし得ないことが多いので、恋愛に苦しむのである。⑥の自分の性についての葛藤も、これは女性ももっていたものであったが、女性としてもっと生き生きとしていきたいという思いが、その葛藤の元にあると考えられる。

このように、アイデンティティ危機における葛藤の内容を見ていくと、葛藤のもとに、こうありたいという希望、言い換えると思いがある。この我々がもつ、こうありたい、こうしたいという思いが、葛藤、言い換えると、ズレの基準にあるといえる。現実の中ですべてのことが実現したり可能になつたりすることはあり得ないが、どんな思いをもっているかということは、その思いを基準にして、その個人の葛藤が生じ、さらには、その個人の人生がその思いや葛藤をもとにして、展開

していくものであるといえる。その点で、自分の願望、将来への思いに着目することは、居場所、さらには、ズレの基準を考える上で、重要な視点となると考えられる。

(2) レビンソンによる生活構造と「夢」

居場所という見方は、レビンソン (1978) の生活構造 (life structure) という概念に関連するものである。彼は、精神分析における内的な見方と社会学的な見方を統合しようとして、生活構造という概念を提出している。この生活構造という見方によって、彼は、成人期の発達を捉えようとしている。ここでは、成人期の生活構造の中で、彼が成人期前期 (17 才くらいから 33 才位まで) の発達課題の一つとして、「夢」をあげていることに注目したい。その課題とは、「夢をもち、その夢を生活構造の中に位置づける」こととしている。なぜ夢が成人期前期の発達において重要かといえば、「青年がはじめて築いた生活構造がその夢と一致し、その夢を満たすものであろうと、その夢に反するものであろうと、その夢によって青年の人間成長は大きくちがっているかもしれない。夢が青年の生活と結びつかないままだと、その夢は死んでしまうだけでなく、それとともに青年の生きている実感や目的感も失われてしまう。」と述べている。つまり、それぞれの個人のもつ、将来への希

望、思い、夢が、現実生活の中で果たし得た場合にも、達成できなかった場合でも、その夢がその個人が、どんな生活を送るか、どんな生活構造を形成するか、に影響を与えるということである。居場所という表現をすれば、その個人がどんな思いをもつかによって、その人の現実生活の中での居場所が変わっているといえる。レビンソンは、青年期からそれぞれの個人がはぐくんできた夢が何であり、それに対して、どのような対応をするのかが、成人期の発達にとって重要な要因であることを示している。

先に述べた、ズレの修復について、どうなるとズレはなくなったのかという基準には、個人がどんな思いをもっているかが重要な問題である。つまり、その本人がどのような未来の居場所を思い描くか—これは、レビンソンのいう夢と同義であると考えられるが—その思いに到達できたとき、つまり、これでよしと思えるときに、そのズレは消えると考えられる。

(3) 再び同一化からアイデンティティへ

ズレの発生の基準、そして、ズレの修復の基準として、その個人のもつ思いに着目したが、それは個人がどんな人間を自分の目標としているか、モデルとしているかに関係している。今の自分ではない、成長した自分を目指すわけであるから、

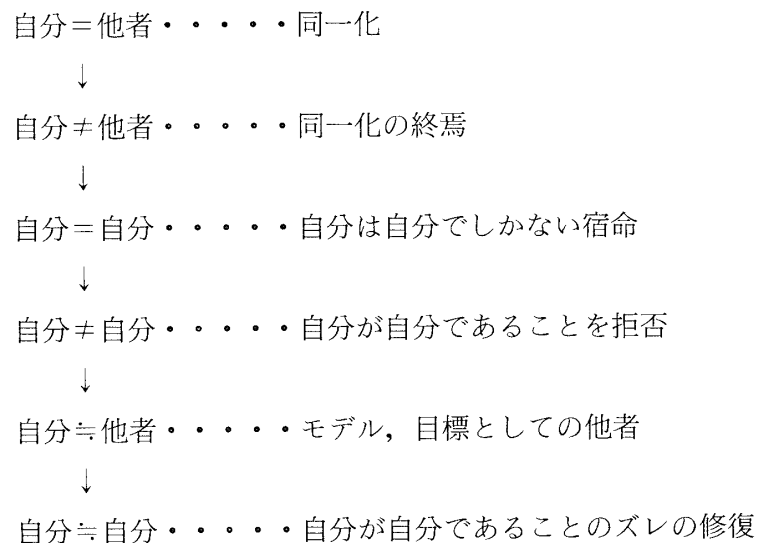


図7 ズレの発生と修復

そうしないと自分の抱えているズレは修復できないとするならば、何かを、誰かをモデルとして目指すことになる。すると、再び同一化が問題になり、どのような人物を目指すかが問題になる。

しかし、この場合の同一化は、自分が自分でしかないことを前提とした上での同一化である。つまり、自分は誰でもない自分なのであるが、様々な宿命を抱えた上で、今の自分ではなく成長した自分になるには、どんな人物を目標にしモデルにするかということである。

こうしてみると、アイデンティティにまつわる問題とは、自分がもつ宿命を引き受けること（宿命論）、自分自身に問いを発すること（自分への問い論）と、さらに、自分の思い描く希望や思いをもつことによって、自分自身を成長させていくこと（成長論）にあるということが出来る（図7参照）。

これまで筆者は、アイデンティティを居場所と物語と捉え直そうとしてきたが、ここに至って、アイデンティティとは、その問題の起点から考えると「自分が自分であること、私が私であること」と再度、捉え直すこととする。

6. まとめと課題

まず、本論では筆者のこれまでのアイデンティティ概念を居場所と物語として捉え直すという作業（小沢，1992；1996；1997）に続いて、アイデンティティにまつわる問題の起点を考えることで、アイデンティティという用語の意味の根本に立ち返った考察を行うことができたといえる。私が私であること、自分が自分であること、という表現で、二つの私、自分を示し、その間のズレという違和感をアイデンティティの起点として捉えたわけであるが、今回の考察において、前者と後者の私、自分とは何か明確になったわけではない。前者の自分については、E. H. エリクソンの「私 I」という言及が適切であると考えたが、やや不明確な観は否めない。また、後者の自分においても、様々な自分をめぐる制約や限定を含め宿命や縁という表現で捉えたが、この点についても明確化のための再考を要する。ただやや抹香臭い捉

え方ではあるが、「自分が自分であること」の宿命や縁という日本語による表現を用いたのは、それがアイデンティティの根幹に迫る内容を含むものであると考えられるからである。

次に居場所についてであるが、居場所とは、アイデンティティという見方からすると、個人と社会との接点であり、社会の中で心理的に生きていく上で必要なものである（Erikson, 1959）。ただ、居場所という言葉は、ややもすると、ただの適応の問題として捉えられてしまう危険性もある。しかし、アイデンティティにまつわる問題の起点から、そのズレを修復する試みとして、居場所を求める役割実験を捉えたことは、アイデンティティという用語を背景にした居場所という見方であることを、再確認した意義があると考えられる。また、このような見方をした上で、通常意識においてどのように青年が居場所を捉えているか（白井，1998）、また大学という場はどのような空間的配置をしており、それが学生である青年にどのような影響を与えているのか（都筑，1998）という広い視野に立った研究からの示唆も必要であると考えられる。

今回は、居場所を求める役割実験によるズレの修復に焦点を当てたが、今後は物語についても考察していくことが必要となる。物語という視点は、居場所とはまた別の視点から、ズレの修復を試みるものであり、その解明は今後の課題といえる。物語とは、自らの人生への意味づけという視点があり、居場所よりさらに慎重な言及が必要とされることが考えられる。特に、生と死の問題、古来からの宗教の役割など、より深い考察が求められる。

最終的には、アイデンティティの全容を、ズレを起点として個人の主観的な視点からその個人の居場所と物語によって、解明していくことが目標である。これは西平（1970，1996など）による全生活空間関連図を、生涯発達の鳥瞰図から着地した個人の主観の視点から描くことの試みといえる。と考える。

また、筆者は、ズレを主観的な違和感と言い換えているが、これは現象学的な立場に立つがゆえである。ズレにおける明確な具体例は、自分と他

者の間の対立をきっかけにしたものがある。そこで、自分が問われることがあり、自らが不安定になり危機的な状況に置かれることもあるだろう。ただ、本論では外的な危機を受けて、自分が自分であることが揺さぶられることこそ、アイデンティティの問題であると捉えている。つまり、自分と他者の間の外的なズレをきっかけに、自分が自分であることに触れる、内的なズレこそが、アイデンティティの問題であるという見方に立っている。このような見方を現象学的な立場と筆者は理解しているが、この点に関して、考察が必要である。さらに、以上のような概念的考察の上に、面接による研究も求められる(小沢, 1998)。

注) 本論は、第 62 回日本心理学会シンポジウム「文化的アイデンティティを考える(鈴木一代企画)」において、「アイデンティティ—その現われる場面、その概念、その起点」と題して行った話題提供の草稿に加筆したものである。

引用文献

- 天谷 裕子 1996 自我体験の研究 名古屋大学研究紀要
 天谷 裕子 1997 自我体験の実証的研究 第 38 回日本教育心理学会発表論文集
- Erikson, E.H. 1950 *Childhood and Society*. W.W. Norton. (仁科弥生訳 1977 幼児期と社会 みすず書房)
- Erikson, E.H. 1959 *Psychological Issues: Identity and the Life Cycle* International Universities Press. (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—誠信書房)
- Erikson, E.H. 1967 *Identity, Youth and Crisis*. W.W. Norton. (岩瀬庸理訳 金沢文庫)
- Erikson, E. H. 1970 *Talk with Evans* W. W. Norton. (近藤邦夫訳 エバンスとの対話 誠信書房 1975)
- Erikson, E.H., Erikson, J.M. & Kivnick, H.Q. 1986 *Vital Involvement in Old Age* (朝長正徳・朝長梨枝子訳 老年期 みすず書房)
- 河合 隼雄 1980 大人になることのむずかしさ 岩波書店
- Levinson, D.J. 1978 *The Seasons of Man's Life*. Sterling Lord (ライフサイクルの心理学 南博訳 講談社学術文庫)
- 溝上 慎一 1997 第 38 回日本教育心理学会シンポジウム「アイデンティティの本質を探る」における質疑応答
- 西平 直喜 1970 青年心理学方法論序説 平安書院
 西平 直喜 1996 生育史心理学序説 金子書房
 西平 直 1993 エリクソンの人間学 東京大学出版
 西平 直 1997 アイデンティティの出自 第 38 回日本教育心理学会 シンポジウム「アイデンティティの本質を探る」話題提供
- 小沢 一仁・高木 秀明 1988 追跡面接による青年期の同一性達成過程における葛藤の焦点 横浜国立大学保健管理センター年報 8
- 小沢 一仁 1992 人それぞれが創る物語 山添正編著 現代日本の子どものエコロジー プレイン出版
- 小沢 一仁 1994 a 心理学のパラダイムからみたアイデンティティ・モデルの模索 帝京学園短期大学研究紀要 第 6 号
- 小沢 一仁 1996 a アイデンティティを居場所と物語として捉え直す概念的試み 日本発達心理学会第 7 回大会学会発表論文集
- 小沢 一仁 1996 b 現象学的アプローチを用いた青年の自己理解のための対話的研究の模索 帝京学園短期大学研究紀要第 8 号
- 小沢 一仁 1996 c 自己理解のためのアイデンティティ概念の捉え直しの試み 東京工芸大学工学部研究紀要 第 19 巻第 2 号
- 小沢 一仁 1997 自己理解とアイデンティティ 東京工芸大学工学部 研究紀要第 20 巻第 2 号
- 小沢 一仁 1998 青年の居場所から見たアイデンティティ 日本青年心理学会第 6 回総会テーマセッション「青年心理学から見た「居場所」の問題」話題提供
- 落合 良行 1983 孤独感の類型判別尺度 (LSO) の作成 教育心理学研究 31.
- 落合 良行 1993 青年の理解 青年の心理学 ミネルバ書房
- 落合 良行 1994 青年心理研究における 3 方法: 「観る」「確かめる」「伝える」 青年心理学研究第 6 号
- 白井 利明 1998 学生は居場所をどうとらえているか—自己受容とセルフ・エスティームとの関連— 日本青年心理学会第 6 回総会テーマセッション「青年心理学から見た「居場所」の問題」話題提供
- 鑓 幹八郎 1995 アイデンティティの心理学 講談社
- 都筑 学 1998 キャンパスにおける大学生の居場所—郊外型のマンモス私大の例— 日本青年心理学会第 6 回総会テーマセッション「青年心理学から見た「居場所」の問題」話題提供
- 渡辺 恒夫 1992 自己の発見とは何か 東邦大学紀要 24